

【旧約聖書日課】サムエル記上 16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かせなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」²サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、³いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」⁴サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」⁵「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、いけにえの会食に一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。⁶彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。⁷しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」⁸エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」⁹エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」¹⁰エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」¹¹サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」¹²エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」¹³サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

【福音書日課】 マタイによる福音書 3章13～17節

13そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。14ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」15しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。16イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。17そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

主イエスの洗礼【こども説教のために】

ご降誕の祝いのうちに新年を迎えた教会は、今日からしばらく、主イエスの歩まれた道をたどる期節を過ごします。わたしたちがたどる道行きは、「主の洗礼」の出来事から始まります。

主イエスが、弟子を招き、人々に教えたり、病気を癒したりという宣教活動をお始めになられたのは、三十歳のころだったといえます。それまでは、生まれ育ったナザレで家族と共に生活されていたのでしょう。ところが、その生活を離れて、主イエスはまず、ある人を訪ねて行かれました。ヨルダン川で人々に洗礼を授けていたヨハネのところでは、

ヨハネは、町ではなく荒れ野で生活している、風変わりな人でした。柔らかい布の服ではなくラクダの毛衣を着ており、パンや魚ではなくイナゴと野蜜を食べていました。ところが、そのヨハネのところに、多くの人が集まって来ていました。ヨハネが「悔い改めよ。天の国は近づいた」(3:2)と告げて、神の御心を教えるのを、多くの人々が聞こうとしたのです。ヨハネは、その人々に悔い改めて神に立ち帰るしるしとして「洗礼」を授けていたのです。

主イエスも、そのヨハネのところに行かれました。ヨルダン川に行き、そこで、ヨハネに洗礼を授けてもらう人々の列に並ばれたのです、多くの人々の中の一人として。洗礼をお受けになられたとき、主イエスは、不思議なものをご覧になり、またお聞きになりました。ご覧になられたのは、**神の霊が鳩のように御自分の上に降ってくる様子**です。お聞きになられたのは、天から響いた「これはわたしの愛する子」という声です。主イエスは、その経験を弟子たちにお語りになり、「人々に洗礼を授けなさい」(28:19)と命じられたのです。そこで、弟子たちの教会で洗礼を授けられた者は、神の霊が与えられた者として、「神の子」と呼ばれて歩むことになったのです。

洗礼から始まる《神の子》の人生

讃美歌 68 番「愛するイエスよ」は、51 番「愛するイエスよ」を元にしてパロディとして作られた洗礼讃美歌です。

洗礼と言えば幼児洗礼が当たり前だった 18 世紀のドイツの教会で、洗礼式は日曜日の礼拝とは異なる機会に、幼子の家族だけが集まって執り行われるのが当たり前でした。けれども、それに異を唱える者もあったのです。洗礼式は、日曜日ごとに集められる教会の礼拝の中でこそ執り行われるべきだ、と。礼拝に集められる教会が、自分たちの間に与えられた幼子を憶え、その幼子と共に神の御前に進み出る者となる。その初めての機会として、幼子の洗礼は執り行われるべきだと考えた者たちもいたのです。

そのような者たちの思いから、この讃美歌は作られました。日曜日の礼拝でよく歌われる定番の讃美歌のパロディとして作られました。あまり歌われることなく埋もれていたこの讃美歌を、『讃美歌 21』は、洗礼讃美歌の一つとして採用したのです。

幼児洗礼に際してこそ歌うのにふさわしい讃美歌ですが、今日、皆さんと共に歌いたいと思いました。年末年始のご降誕の祝いを終えた教会の皆さんと共に歌いたいと思いました。わたしたちの間に与えられている幼子らは、わたしたちの手に託されているのです。その一人ひとりを連れて、神の御前に進み出る群れであることを祈り願う教会の、祈りの歌として、この洗礼讃美歌を大切にしたいのです。

もちろん、この讃美歌は、成人の洗礼に際して歌っても良いのです。幼児洗礼と成人洗礼を区別する理由はありません。神の恵みのしるしとして、洗礼は、幼児にも成人にも同じように授けられます。本人の意志が明確かどうかの問題になるのは、洗礼を授けられた後のことです。自分の意志をはっきりと自分の責任で言い表せない幼子であれば、洗礼を授けられた者としての自覚を問うことはできないでしょう。そのような責任は、保留となります。けれども、洗礼そのものは、幼児でも成人でも同じです。神の恵みとして授けられるのです。主イエスが洗礼をお受けになられたときのように、わたしたちの中の一人が洗礼を授けられるとき、神は、その一人に聖霊をお与えくださるでしょう。天から「これはわたしの愛する子」と宣言してくださるでしょう。教会は、洗礼を授けられる者が幼子であっても、成人であっても、その人に聖霊が与えられていることを宣言し、その人を「神の子」と呼ぶようになるのです。そして、聖霊を与えられた「神の子」として、共に神の御前に進み出る歩みを、その人の生涯が閉じる日まで続けるのです。

教会は、「神の子」と呼ばれることから始まる人生を共にする者たちの群れ、共同体です。教会は、すべての人を「神の子」とお呼びしたいのです。

主イエスが来られたならば

「神の子」と呼ばれるべく、日曜日の教会へと集められて来られた皆さんの中には、まだ洗礼をお受けになられていない方もあるでしょう。長く教会に連なりながら、決心できずに来られた方もあるでしょう。

もちろん、ご自身の意志で拒まれているならば、その人に無理強いすることはできません。何か躓きになることがあるからこそ、拒まれているのでしょう。教会やそこに連なる者、場合によっては牧師が躓きになっていることもあるかもしれません。そうであれば、一刻も早く、その躓きを取り除かれるよう、わたしたちも祈らなければいけません。

けれども、必ずしも何か躓きになっているわけではなくても、洗礼を受けるに至られずに来ている方もあるでしょう。もしかすると、そういう方は、決定的なきっかけが訪れるのを待っていらっしゃるのかもしれませんが。劇的な信仰の体験をすれば一歩踏み出せる、と思いながら、躊躇なさっているのかもしれませんが。

わたしは、今年で受洗 40 年になります。高校二年生のクリスマスに洗礼を受けました。両親が信者で、祖母たちも信者、姉と兄も高校二年生で洗礼を受けていました。ある日の日曜日、教会の行事が終わって帰ろうと仲間たちと中庭に集まっていたとき、牧師からさりげなく声を掛けられたのです。「お兄さんは高校二年生で洗礼を受けたけれども、どうですか」とだけ。仲間たちと喫茶店に行くことになっていましたので、その場でうっかり、「はい、そう考えていました」と思ってもいないことを言ってしまいました。クリスマスまで二カ月を切っていました。牧師と一回だけ面談をしました。牧師から特別な指導はありませんでした。「よいのだろうか」と悩みながら、クリスマス礼拝当日を迎えました。何の準備もせず、普段着のまま臨んだ洗礼式でした。けれども、教会の皆さんは、わたしの洗礼を祝福してくれました。初めての聖餐にあずかったとき、ようやく、「この洗礼は、自分が考えていたよりもずっと前から、準備されていたことだったんだ」と納得したのです。

まだ洗礼をお受けになられていない方のもとにも、そのときには、主イエスがおいでくださるでしょう。主イエスと出会うことができれば、洗礼にあずかることに何の躊躇もなくなるでしょう。

それよりも何よりも、教会は、皆さんのことをお迎えしたいのです。洗礼をお受けになるためにヨハネの前に進み出た主イエスのように。まだ洗礼を受けていない皆さんを、主イエスであるかのようにお迎えして、洗礼をお授けしたいのです。皆さんが、わたしたち教会のところへ来てくださったからです。主イエスが来られたように、わたしたちは、皆さんを迎えます。洗礼を授け、聖霊の与えられていることを祝い、「神の子」とお呼びいたします。